



『人間関係論集』の終刊号に寄せて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古林, 清一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/2593

『人間関係論集』の終刊号に寄せて

古 林 清 一

府立系三大学の統合によりまして、人間関係学科およびその紀要としてのこの『人間関係論集』も幕を閉じることになりまして、この第22号が終刊号ということになりました。この雑誌は元来、社会福祉学科時代の紀要『社会福祉評論』が前身であります。私のような、現在は人間関係学科のメンバーでない者が巻頭に一文を載せるのは僭越とは存じますが、長らくこの学科に在籍したこともあって、終刊号に一筆書くことになった次第であります。

永年、社会福祉・人間関係学科に歴史学者として在籍しましたが、その時、学んだことをひとつ挙げるとすると社会福祉ということかと思えます。昨年頃より、年金問題が政治問題化しまして、社会福祉に対する私の忘れかけていた関心を喚起することになりました。人間の間で社会福祉の制度が生まれてきた背景には、いつの時代にも、人間が生存するにあたってそれを脅かす様々の危険、つまり、貧困、飢餓、疾病、失業、老齢などがあるということです。歴史的には、このような危険に対処するために人々の相互扶助のシステムが作られまして社会福祉の諸制度が作られてきました。

現在の社会福祉の諸制度のうち、その根幹をなしているものは誰が見ても、社会保険制度にあります。歴史的には、19世紀末頃から西欧諸国で労働者階級の人々を対象として、健康保険や失業保険の形をとって、形成されはじめ、20世紀の中旬、第二次世界大戦後に福祉国家および社会保障制度の成立によって、基本的枠組みは形成されたものと思えます。

ところが現在の日本では、このシステムが大きく変質しております。社会保険制度のあり方からしても、その中心は老齢年金保険に移っておりますし、さらに介護保険制度も数年前からスタートしております。現在の社会福祉の制度では、社会保険の主たる対象者がかつてのように労働者階級の人々であるというより、高齢者の人々を対象とするものになっております。

このことの背景には現在の日本の社会が戦前の社会とまるで変わっているという事情があります。戦前の日本人の平均寿命は40歳代であったのに対し、現在の日本人の平均寿命は男女平均すれば、80歳を超えております。つまり、少子高齢化社会の到来ということです。大量の老人たちを扶養するために少数の現職で働いている人々に過重な負担がかかるという問題が生じているわ

けです。高福祉、高負担というよく言われてきたことを想起します。

しかしながら、この少子高齢化社会というもの、その中でも高齢化社会の到来ということは今までの社会福祉の発達が生み出したものと考えられます。国民に平和と豊かな生活を保障してきた福祉国家体制のもとでの社会福祉の発達が生み出した大量の老人たちを扶養するためのコストを誰が担うのか。また、そのような状況下で社会保険制度や福祉国家体制を維持していくことが果たして可能なのでしょうか。これらのことが自らも老人の仲間入りを目前に控えた私の問いであります。